

「夢」をもち、「夢」に向かって努力する生徒

原北中学校 学校通信



令和2年 6月12日 第5号

福岡市早良区小田部7-11-1

電話 092-851-3344

発行者 校長 福崎 浩 信



ステージが上がる中で、学校が活気を取り戻しています。

一斉登校午前中授業(40分授業5コマ後給食下校)2週目が終わります。8日からは、およそ70日ぶりの部活動も始まりました。毎朝、先生方は、健康観察を行ったり、給食の配膳、放課後の消毒などに追われたりしていますが、日々、正常化している学校生活を何よりも喜んでいきます。

来週からは、一斉登校終日授業、部活動も2時間程度となります。2・3年生には待望の1年生の仮入部を開始します。

今回は、入学式、始業式、任命式の中での話の概要等を紹介いたします。

入学式式辞より

薬師寺の修復に使われた、二千年以上の檜が残っている台湾の山は、とても厳しい環境です。山には土なんてありません。岩ばかりです。粘板岩という、粘土を押し固めたようなものです。それが風化して割れ、そのあいだ、あいだに水がしみ込んでいきます。その、ほんのわずかな水をめざして、檜の根が岩の間に入っていき、幹の高さと同じくらい根を張るので厳しい環境にあっても枯れたり、倒れたりすることがありません。環境とか育ち方が、一生を決めてしまうということです。厳しい環境であったり、難しい問題であったりしたときこそ、チャンスと捉え、出来ない理由を探すのではなく、先に、出来ることや、出来る方法を考え、チャレンジする能力を備えて下さい。

もう一つ、足の速いうさぎが、自身の能力を過信し油断した為に、歩みは遅いけど地道に歩き続けた亀に敗れてしまうという、誰もが知っている話をしました。この話が教えてくれるのは、どんなに高い能力や才能を持っていても、怠けていけば、目標を達成することが困難になるということです。もう一つ、この話には、教えが隠れています。それは、「ウサギとカメの見ていたものが違っていた」、ということです。ウサギはカメばかりを見ていました。その為、カメが見えなくなったので、油断をしました。それに対し、カメは、ウサギではなくゴールを見ていました。ひたすらゴールをめざして、歩み続けた為、目標を達成し、そして勝利を得たのです。「目標への意識の差」が勝敗を分けたのです。

「ライバルや周りは気になるものですが、そのことだけにとらわれず、ひたすら自分の目標に向かって努力することが大切である」ということです。

「目標は高く、努力は地道に」、そしてその過程の中で、「目標が行動を変える」、「目標が人を育てる」ということです。

始業式式辞より 規準は多く・・・基準は高く・・・

石を積み上げて建物を作っていた時代に、ある人が、3人の職人に「何をしているのか」とたずねました。

一人目の石積み職人は、「観てのとおりです。石を積み上げています。」

二人目の石積み職人は、「石を積み上げて、教会を作っています。」

三人目の石積み職人は、「石を積み上げて、町の人から大事にされる、そして町の人を幸せにする教会を作っています。」と答えたそうです。

仕事そのものは同じですが、仕事をする目的・目標の高さが違います。

同じ仕事をしてはいますが、おそらく、その仕事ぶりは変わってくると思われれます。

石を勉強、部活動などに置き換えて、自身の目標の高さを確認して欲しいと思います。

今後の各種学力調査

※6月12日(金)現在

6月23日(火)	領域別学力診断テスト
7月16日(木)	定期考査①
17日(金)	定期考査②
8月31日(月)	理解度確認テスト(夏休み課題テスト)

任命式挨拶より

立候補した人、推薦された人、それぞれと思います。

大変だとは思いますが、仲の良い＝素晴らしいクラスにする為に、努力を惜しまないで頑張ってください。自分自身の成長にもつながります。

学級委員として何をすれば良いのか、3つのポイントを話します。

まず、1つ目は、「自覚」と「やる気」と「責任」を持って下さい。

一生懸命にやっていたら必ず人はついてきます。

2つ目は、「事実を正確に積み上げ」「行動を起こし」「その結果を確認」ながら活動して下さい。リーダーとして、クラスの一人一人の気持ちを十分に理解して、みんなのために頑張ってください。

3つ目は、色々なことを、「率先垂範」して下さい。自ら実行して模範を示して下さい。

生徒会が皆さん一人一人のために、何かをしてくれるのを待つのではなく、各学級の一人一人が生徒会活動を活性化するために、何が出来るか、何をするか考え、実行・評価に移すことを願っています。

置かれた新たな場所で、納得解を出してくれるものと信じています。

道は開ける(成せばなる) アフターパンデミックの技術革新と経済成長

イギリスが産業革命を起こすきっかけとなったのは、ペストによる労働力不足を機械で補おうとしたことでした。また、巨大な工場を建築するための資金を集めることのできる金融システムが存在しました。労働者を教育する私塾が全国にありました。

産業革命に続く科学革命に関しても、次のような背景があります。産業革命の結果、市民階層が増えていきます。私塾から公共教育が普及して、国民の識字率が向上した結果、大衆文学が流行します。ティーサロン、パブが各町にできて、市民の間で交流が盛んになっていきます。大衆文化が出来上がり、その結果、科学への理解が深まっていくのです。

産業革命からおよそ百年後、日本は、幕末の黒船来航後の開国・戊辰戦争を経て新政府が樹立され、都が京都から江戸・東京へと移されました。

日本が、明治時代に急激な技術の移植や資本主義化に成功したのは、実は江戸時代から素地があったと言われていています。江戸時代の日本では、武士が藩校で学ぶだけでなく、多くの庶民が広瀬淡窓、荻生徂徠、三浦梅園、緒方洪庵らが開いた私塾や、寺院で手習師匠が町人の子弟に教えた

た学問施設である寺子屋に通っていたため読み書きができました。このため出版文化が花開き、人びとはさまざまな本を読んでさらに教養を高めていきました。和算と呼ばれる日本独自の数学は、世界的に見てもかなり高度な内容を含んでいました。日本の初等教育は世界一ともいえたのです。

米国海軍のペリー提督は、日本に西洋文明のスゴさを見せつけようとして、日米和親条約を結んだ際、アメリカの武器、電信機、そして蒸気機関車の模型を贈りました。蒸気機関車は実際に時速32キロで走らせています。

ところがわずか1年後、佐賀藩が独力で蒸気機関車の作成に成功しています。薩摩藩などはその前から蒸気機関の試作に成功したといわれています。伊予宇和島藩も間もなく蒸気船をつくりあげています。佐賀藩などは大砲製造所をつくり、英国の最新のアームストロング砲の製造に成功しています。

このように幕末の日本は文明が遅れているどころではなく、たちまちにして西洋の文明や技術を模倣できるだけの力を持っていたのです。これはペリーたちも感じたらしく、「もし日本が開国したら、米国の強力なライバルになるだろう」という趣旨の言葉を残しています。

いずれにせよ、すでに幕末の段階で、このような状況だったからこそ、日本は明治維新後、わずか20年で産業革命を経て資本主義国家に転身することができたのです。

